

# 「若きサタンの年代記」における 旧約聖書のひとびと

朝 日 由紀子

19世紀後半から20世紀初頭、第一次大戦後のカール・バルトの『ロマ書』の出版時期の頃までの間、アメリカのキリスト教界に大きな影響を及ぼしたのが、自由主義神学である。宗教改革以降の福音主義に対して、19世紀の科学あるいは科学的方法を採用しようとしたのが、自由主義神学であり、その特徴は、科学的な新約聖書研究と史的イエスの研究に顕著に表れている。伝統的神学では、イエスは、人間性と神性のふたつの本性を有すると信じられてきたが、自由主義神学では、イエスの人間性の完全さに強調点が置かれたといえる。そのことから、ひいては、贖罪が意味するものは、人びとへの道徳的影響であるという説に変えられ、カルヴィニズムの説く「生来の墮落」の教理は受け入れられないものとなった。すなわち、「怒りのない神が、罪のない人間を、十字架のないキリストのわざを通して、裁きのない御国」へと導くという自由主義神学に対するH.R.ニーバーの批評は、端的にその変容を捉えているといえよう。

本稿で考察の対象とするマーク・トウェインは、1835年に生をうけ、そのキリスト教教育は、アメリカの正統派ピューリタニズムが命脈を保つミズリー州ハンニバルにおいて始まった。最初、“the Old Ship of Zion”と呼ばれるメソジスト教会の日曜学校に2、3年通った後、母ジェーンが1843年頃長老派教会に変わったことから、ハンニバル長老派教会の日曜学校に移り、カルヴィニズムの濃厚な長老派の教育をうけた。トウェインの少年時代を彷彿とさせ

る作品、『トム・ソーヤーの冒険』の5章の教会の場面で、牧師の説く無間地獄の業火と、救いの予定に選ばれた人々の数が次第に少なくなっていく恐ろしい説教を聞くトムは、少年サム・クレメンズ（マーク・トウェインの本名）と重なる。ディクソン・ウェクターは、『ハンニバルのサム・クレメンズ』の中で、つぎのように解説する。<sup>1)</sup>

Presbyterianism and the Moral Sense it fostered—with its morbid preoccupations about sin, the last judgment, and eternal punishment—entered early into the boy’s soul, leaving their traces of fascination and repulsion, their afterglow of hell-fire and terror, through all the years of his adult “emancipation.” He did not believe in Hell, but he was afraid of it.

ここで指摘されているように、「罪と罰」に関するカルヴィニズムの教理を植え付けられたマーク・トウェインは、その生涯を通じて、時代の潮流となったりベラルな神学、自由主義神学の影響下にあってもなお、宗教的格闘を続けていったことに注目したい。

本稿では、マーク・トウェインの未完の「問題作」であり、原罪による「墮落」後の人間の歴史を俯瞰する「天使」を設定するという独創的な作品を取り上げ、その中心的テーマが何であるかを考察していく。

## 1.

まず取り上げる作品についての説明から始めたい。前段で問題作という言葉を使ったのは、マーク・トウェインの死後、マーク・トウェイン文学に関する管財人となったアルバート・ペインが、マーク・トウェインの遺稿をフ

1) Wecter [1961] (88)。

レデリック・ドゥネカと共同編集し、1916年、『ミステリアス・ストレンジャー、あるロマンス』として出版した件を指している。この作品は、後世の研究で、ふたりの「編集上の詐欺」により出版されたと判明し、なかでもその最終章が、1916年以来、半世紀にわたり読者を錯誤におとし入れた点が指摘されたのである。1963年、ジョン・S・タッキーが、マーク・トウェインの原稿に直接あたってその執筆時期を調査し、ペインがトウェインの遺稿のなかから「若きサタンの年代記」を採用し、別の遺稿からみずから見つけた6ページの「作品の結び」を最終章にしたことは、改ざんであると証明した。またさらに、タッキーの研究の同一線上で、ウィリアム・M・ギブソンが、トウェインの自筆原稿の綿密な検討を行い、本来あった三種類の原稿そのままを蘇生させ、それらの執筆時期を特定し、トウェインがかなり長い時間をかけて同じテーマに取り組んでいた事実を突き止めた。なかでも、本稿で取り上げる「若きサタンの年代記」の執筆時期は、トウェインがウィーンに滞在中の1897年11月から翌年の1月半ば、1899年の5月から10月、そして、「年代記」の残り半分は、ロンドンで1900年の6月から8月にかけてとされている。その後、この「若きサタンの年代記」の一章を再利用し、ただし作品の年代を「1702年5月」から「1490年冬」に変更して、同じオーストリアの「エーゼルドルフ」を舞台とする「No.44、ミステリアス・ストレンジャー」と名付けた原稿を、トウェインは、1902年11月から書き始める。さらに、1903年11月フローレンス到着後執筆を再開し、その「作品の結び」の原稿は、妻オリヴィアが死去した1904年6月5日以前の苦しい日々の中かで書かれたと推定され、明らかに、ペイン版で最終章とされた「作品の結び」は、「若きサタンの年代記」に付されるべきものではないことは、明らかになった。<sup>2)</sup>

このような出版事情を考慮に入れ、本稿では、ギブソンの *The Mysterious Stranger Manuscripts* に所収の “The Chronicle of Young Satan” 「若きサ

2) 本節は朝日〔2016〕に拠っている。

タンの年代記」を原典として採用し、以下考察していく。

前述のように、最初のマーク・トウェイン原稿では、冒頭「1702年5月であった。」が、ペイン版では、「1590年冬であった。」とされていることに、まず注意したい。一章での注目すべき宗教改革者たちへの言及を、ペインが削除するために改変したと考えられる。作品の時期の設定に続けて、作品の舞台となるオーストリアは、「世界から遠く離れ、眠っていた。まだ中世の時代であった」と、説明される。さらに、「精神を計る時計によればまだ信仰の時代」と言う者もいた、と語り手は語る。「No.44、ミスティリアス・ストレンジャー」の始まり、「1490年冬であった。」でもなく、1590年でもない、1702年という設定は、歴史的にはすでに中世とは言い難く、近世に入っていた時代であるが、「信仰の時代」であったことをむしろ強調する意図があったと考えられる。語り手は、「僕たち少年にとって、エーゼルドルフは、パラダイスであった。学校の勉強にひどく悩まれることはなかった。重きが置かれたのは、よきクリスチャンであることで、なによりも聖母マリアと教会と聖人たちを敬うことを教育された」といい、信仰生活で満たされていたエーゼルドルフの村が読者に印象付けられる。

つぎの二章で、語り手の友達の二人の少年が紹介される。地方裁判所首席判事の息子のニコラウス・バウマンと村一番の宿屋の息子のセピ・ヴォールマイヤー、そして、語り手の名は、テオドール・フィッシャーといい、父は、教会のオルガン奏者であり、また村の収税吏であり、有能な村民として尊敬を集めている人物である。三人は、領主の城の最年長の番人にかわいがられ、夜になると番人から不思議な話をいろいろ聞き、とくに興味を引く体験談として幽霊と天使との違いを教えてもらう。天使は、「翼をつけていなくて、」外見も話し方もふつうの人間と変わらないが、話している最中にふいに消えてしまうというような人間には無理なことができ、陰気な幽霊と違って、愉快で快活だ、という。この話が強く心に刻まれたつぎの日、少年たちは、実

際に「天使」に出会うことになる。最初は、「ストレンジャー」として三人の目の前に現れた「天使」だが、すぐにさまざまな奇跡で少年たちを魅了した後、思い切って語り手が、「君はだれなの」と尋ねると、「天使だよ」とあっさり答える。その「天使」は、不思議にも少年たちの名前をすでに知っており、そこで、セジが、名前を聞くと、「天使」は、「サタンだ」という。「サタン」という名前を聞いたとたん、少年たちは一瞬ぎくりとするが、読者もまた、名と実がまったく異なるこの「ストレンジャー」の意外性に、ただならぬ関心が喚起されるであろう。サタンという名を聞いた少年たちは、まっさきに人間の墮落の原因を作ったサタンを思い浮かべるが、「天使」は、「あのサタンは、ほくの伯父さんで、かつては天使だった、アダムとイヴをだましたのも名前こそほくと同じでも、ただ伯父さんひとりのことで、ほくも他のどの親類も関係がなく、ほくたちは永久に罪を知らない」と説明する。

マーク・トウェイン文学のなかで、「サタン」を中心人物にすえた作品がひとつの興味あるジャンルを形成していると思われるが、サタンという名前をもつ「天使」というキャラクターが登場するのは、「若きサタンの年代記」だけである。ゲーテの『ファウスト』のメフィストフェレスをパロディ化したサタンが登場する“Sold to Satan”「サタンに売り込む」も、“That Day in Eden” (Passage from Satan's Diary) 「エデンの園におけるあの日」も、*Letters from the Earth* 『地球からの手紙』も、文字通りの「サタン」である。『地球からの手紙』は、大天使サタンが、「節操のない発言を度々して」創造主から罰として宇宙空間に追放された後、仲間の大天使ガブリエルとミカエルに地球事情を知らせる11通の手紙を書き送るという構成の作品である。サタンの書簡という着想は独創的といえよう。ここで特筆すべきは、三通目の手紙で、アダムとイヴが禁断の木の実を食べたことに触れ、それはじつは彼らが悪事を成すことが出来るようになったことを意味するのに、教会は、「モラル・センス」を、人間の究極の貴重な財産であると間違った解釈をしてきた、

とサタンが異議を唱える点である。「若きサタンの年代記」において、主要な登場人物のひとり、ピーター神父が、少年たちの「モラル・センスとは何か」という疑問に答える場面で、「善と悪とを区別する能力のことであり、それこそが、人間と獣とを区別し、神の不滅にあずかれるのは、ひとえにこのためだ。」と説明する。サタンの指摘する「モラル・センス」観がここにも表現されているといえる。この「モラル・センス」をめぐる問題は、「若きサタンの年代記」の最大のテーマでもある。マーク・トウェインのサタンは、人間の歴史がいかに残虐な行為に満ち満ちているか、そしてそれは旧約の神の残酷さの似姿であると、人間の良心あるいは「モラル・センス」を徹底的に糾弾する。ただし、「若きサタンの年代記」の「サタンという名の天使」が、「モラル・センス」を問題とするときの激越な口調は、エーゼルドルフの少年たちに語るように、人間に対して憎しみの感情をもっているからではない。「天使」は、人間とは違って「モラル・センス」とはまったく無縁であるという性格づけによるものである。同時に、トウェインは、「モラル・センス」を有しているという理由で、被造物の中で最高の存在であると思い込んでいる人間の自己欺瞞を暴くエージェントの働きを、『地球からの手紙』のサタンと同様に担わせていることも確かであろう。

このサタンの名をもつ天使は、少年たちから、天使と人間の違いを尋ねられると、「人間は土で作られている。—ぼくは作られているところを見た。ぼくは、土で作られていない。」と答え、人間のように時間と空間に束縛されていない、「現に天地創造も見たし、アダムが作られるのも見たし、サムソンがその柱の列に体当たりして、神殿を倒してしまうのも見た。」と語る。そして、作品を通じて、魔法をつぎつぎと操出し、少年たちをこの上なく愉快にし、たえず天使の存在を渴望させる面と、人間の愚昧さや残酷さを容赦なく少年たちに見せつけ、不愉快や落胆を味わわせる面との両面を發揮していく。こうした二重人格的な面をもつ「天使」を論じて、

研究者たちは、「造物主の分身あるいはマーク・トウェインの代弁者」(コールマン・パーソンズ)、「芸術家」(E・H・エビイ)、「慰めの人キリスト、ミズリー長老派の厳格で嫉妬深い復讐心に燃えた父なる神、人類に無関心な超自然的力、そして反抗者サタンの矛盾する四要素の合成物」(ギブソン・ウィリアム)、「キリスト」(グラディス・ベラミ ジョン・メイ)、「神とサタンの合成物」(ロイ・メイ)、「墮天使」(マリア・マロッティ)、「預言者」(ジョー・フルトン)など、多様な解釈を施している。

## 2.

Allison Ensorは、マーク・トウェインの全作品における聖書からの引用数を調べており、その研究は、トウェインの聖書に対する関心のありかを知る上で興味深い。具体的に数値を示すと、創世記(295回)、マタイによる福音書(133回)、ルカによる福音書(78回)、創世記を除く旧約聖書(47回)、ヨハネによる福音書(42回)、人物については、筆頭がアダム(76回)、ついでキリスト(44回)、ノア(34回)、放蕩息子(28回)、イヴ(27回)、ソロモン(27回)、モーセ(22回)の順になる。聖書の人物のなかで、アダムの数がトップであるのは頷ける。作品中の言及数だけではない。まず、トウェインの最初の旅行記*The Innocents Abroad or The New Pilgrims Progress*(1869年)で、エルサレムに到着してから、「アダムの墓」に案内され、まるで自分の曾祖父に思いを馳せるかのように、6千年前に亡くなった「血縁者の墓」に感動し、感涙にむせんだ、と記しているのを始め、アダムの原稿を発見し、翻訳紹介をするという形式をとった作品*Extracts from Adam's Diary*(1904年)や、続いて、1905年には“Adam's Soliloquy”「アダムの独白」と題する作品まで創作しているからである。

Ensorの一覧表と比べて、「若きサタンの年代記」でとくに注目するのは、さきに見たように、アダムへの言及と同時に、“He saw the world made;

he saw Adam created; he saw Samson surge against the pillars and bring the temple down in ruins about him;" (50) と、「サムソン」が引用されていることである。サムソンは、「士師記」に登場する士師のひとりである。ヨシュアが死んで以降のイスラエルの民の歴史である「士師記」には、12人の士師たち、最初のオテニエルから最後のサムソンまでの約325年間に記されている。文学作品としては、ジョン・ミルトンの『サムソン・アゴニステス』が名高く、サムソンの怪力の秘密を探り出し、裏切った愛人のデリラとの関係に苦しむサムソンがメイン・テーマである。一方、ペリシテ人に捕えられた後のサムソンの行動を見たのが、「若きサタンの年代記」のサタンであり、本稿で考察するテーマとの関連で、上記の引用に該当する箇所として「士師記」16:23-30を見ておく。

ペリシテ人の領主たちは集まって、彼らの神ダゴンに盛大ないけにえをささげ、喜び祝って言った。「我々の神は敵サムソンを我々の手に渡してくださった。」その民もまたサムソンを見て、彼らの神をたたえて言った。「わが国を荒らし、数多くの同胞を殺した敵を我々の神は、我々の手に渡してくださった。」彼らは上機嫌になり、「サムソンを呼べ。見せ物にして楽しもう」と言い出した。こうしてサムソンは牢屋から呼び出され、笑いものにされた。柱の間に立たされたとき、サムソンは彼の手をつかんでいた若者に、「わたしを引いて、この建物を支えている柱に触らせてくれ。寄りかかりたい」と頼んだ。建物の中は男女でいっぱいであり、ペリシテの領主たちも皆、これに加わっていた。屋上にも三千人もの男女がいて、見せ物にされたサムソンを見ていた。サムソンは主に祈って言った。「わたしの神なる主よ。わたしを思い起こしてください。神よ、今一度だけわたしに力を与え、ペリシテ人に対してわたしの二つ目の復讐を一気にさせてください。」



それからサムソンは、建物を支えている真ん中の二本を探りあて、一方に右手を、他方に左手をつけて柱にもたれかかった。そこでサムソンは、「わたしの命はペリシテ人と共に絶えればよい」と言って、力を込めて押した。建物は領主たちだけでなく、そこにいたすべての民の上に崩れ落ちた。彼がその死をもって殺した者は、生きている間に殺した者より多かった。

ここには、第一に笑いものにされたサムソンと、第二に大勢の者を殺したサムソンが描かれている。サタンは、つぎに、少年たちを喜ばせる笑いを語り、サムソンを大いに笑いものにする。“He told some very cunning things that put us in a gale of laughter; and when he was telling about the time that Samson tied the torches to the foxes’ tails and set them loose in the Philistines’ corn and was sitting on the fence slapping his thighs and laughing, with the tears running down his cheeks, and lost his balance and fell off the fence, the memory of that picture got *him* to laughing, too, and we did have a most lovely and jolly time.” (55-6) この話に該当する箇所は、「士師記」15:4-5である。サムソンが捕えるのは“fox”であるが、『新共同訳』では、「ジャッカル」と訳され、“corn”は「麦畑」と訳されている。*King James Version*『欽定訳聖書』では“fox”と“corn”となっており、サタンは、それと同じ言葉を用いている。「狐の尾を松明に結び付け、ペリシテ人の麦畑に放した」サムソンが、「腿をたたき、涙を流して大笑いしながら柵にまたがって眺めていた」以下は、聖書の記述にないサタンの作り話である。挙句の果て、バランスを失い、柵から転がり落ちるというサムソンの様子を思い出して、サタンも笑い出し、少年たちもこの上なく笑って愉快的時を過ごす。イスラエルの民を支配する異教のペリシテ人が、サムソンを「見せ物」にして「笑いもの」にしたことは、

サムソンに屈辱感と復讐心を与え惨劇を招くものであった。だが、マーク・トウェインは、「士師記」の記事にアネクドットを加味することによって、「太陽の子」という意味をもつその名にふさわしい、笑うサムソンを描いて見せた。聖書を文学化するその手法は、注目に値する。

### 3.

本節では、自らの死によって三千人もの人々を殺害したサムソンに、サタンが言及している点に注意し、作品の中で最も重要なメッセージを含むと思われる8章について検討していきたい。待ち焦がれているセピと語り手の前にサタンが姿を現し、二人に「人類の進歩の歴史」を見たいか、と質問をする。ぜひ見たいと答えると、サタンは、その場所を「エデンの園」に変えたのである。少年たちは、まず祭壇の前で祈っているアベルの姿を見る。それから、棍棒を持ったカインが、アベルの方に近づいていき、乱暴な口調で弟に話しかけ、二人は、一瞬顔をそむけた時、激しく打ちおろす棍棒の音と、それに続く甲高い悲鳴とうめき声をはっきり聞く。そして、流血のなかに倒れ、息を引き取ったアベルと、復讐心に燃え、後悔の気持ちもなく、アベルを見下ろしているカインの姿を見る。この箇所で気づくのは、「エデンの園」で最初に目にするのは、アダムとイヴであろうと思われるのに、そうではなく、カインがアベルを殺害する場面であるという点で、さらにこの後二人が何を見ていくかが問題である。少年たちの知らない戦争、殺人、虐殺などの光景がつぎつぎと現れた後、大洪水が来て、ノアの箱舟が暴風雨の洪水のなかで上下に揺れているのを見、場面が変わり、箱舟が止まったアララト山でノアが酔って寝ている姿を目にする。

その後、ソドムとゴモラの場面になり、とくにその説明はないが、「創世記」19:24-25の、「主はソドムとゴモラの上に天から、主のもとから硫黄の火を降らせ、これらの町と低地一帯を、町の全住民、地の草木もろと

も滅ぼした。」の箇所を読者は想起することになるであろう。なぜなら、それに続いて、「洞穴のなかのロトとその娘たち」に言及されているからである。「創世記」の19:30-38に、「ロトの娘たち」が、父の子を身ごもり、姉と妹それぞれ男の子を産んだ記事が書かれている。

そしてまた、ヘブライ人の戦争があり、勝利者が敵の生存者や家畜を虐殺し、若い女だけは生かして分け合っている光景を見る。

つぎに、ヤエルが登場する。“Next we had Jael; and saw her slip into the tent and drive the nail into the temples of her sleeping guest; and we were so close that when the blood gushed out it trickled in a little red stream to our feet and we could have stained our hands in it if we had wanted to.” (134) 「創世記」の世界から、「士師記」の世界に移っている理由は何であろうか。モーセの後継者ヨシユアの死後、約束の地で、イスラエルの民は、各部族の割り当て地で先住民を征服し、定住地を獲得するために敵と戦う必要があったことが、「士師記」に記されている。すなわち、そのテーマは、戦いであり、前述のサムソンを含めて、ここで再び「士師記」からの引用がなされている理由であろう。ただし、裁判官、政治的・軍事的指導者、敵からイスラエルの民を解放する者という役割をもつ士師ではなく、ヤエルというカイン人ヘベルの妻の行状を少年たちに目撃させている点が注意を引く。12人の士師の中のただ一人の女性士師デボラに関する箇所が「士師記」4章と5章であるが、敵の王ヤビンとの戦いでは、実戦の指揮官にバラクを指名し、みずから手を下していない点で、一般にあまり取り上げられないヤエルの方に焦点を合わせたといえよう。

カナン王ヤビンが「鉄の戦車九百両を有し、二十年にわたってイスラエルの人びとを、力づくで押さえつけた」頃、「女預言者デボラが、士師としてイスラエルを裁くようになった」とされ、4章6-7で、「彼女は人を遣わして、ナフタリのケデシュからアビノアムの子バラクを呼び寄せて

言った。『イスラエルの神、主がお命じになったではありませんか。「行け、ナフタリ人とゼブルン人一万を動員し、タボル山に集結させよ。わたしはヤビンの將軍シセラとその戦車、軍勢をお前に対してキシオン川に集結させる。わたしは彼をお前の手に渡す」と。』こうして、バラクとシセラとの戦いが始まる。4章12-13で、「シセラはアビノアムの子バラクがタボル山に上ったとの知らせを受けると、すべての戦車、すなわち九百両に及ぶ鉄の戦車に加えて自分に属するすべての軍隊を召集し、ハロシェト・ハゴイムからキシオン川に向かわせた。」バラクは、タボル山を下り、敵の戦車と軍勢をハロシェト・ハゴイムまで追いつめたため、シセラは、逃走した。そして、このシセラが目指したのが、ヤビンと友好関係にあったカイン人ヘベル一族のヤエルの天幕であった。

少年たちが見た凄惨な光景と、聖書の記述とを照合してみよう。以下に引用するのは、4章18-22である。

ヤエルが出て来てシセラを迎え、「どうぞこちらに。わたしの主君よ、こちらにお入りください。御心配には及びません」と言うと、彼は彼女に近づいて天幕に入った。彼女は、布で彼を覆った。シセラが彼女に、「喉が渴いた。水を少し飲ませてくれ」と言うので、彼女は革袋を開けてミルクを飲ませ、彼を覆った。シセラは彼女に、「天幕の入り口に立っているように。人が来て、ここに誰がいるかと尋ねれば、だれもいないと答えてほしい」と言った。だが、ヘベルの妻ヤエルは天幕の釘を取り、槌を手にして彼のそばに忍び寄り、こめかみに釘を打ち込んだ。釘は地まで突き刺さった。疲れきって熟睡していた彼は、こうして死んだ。そこへバラクがシセラを追ってやって来た。ヤエルは出て来て彼を迎え、「おいでください。捜しておられる人をお目にかけましょう」と言ったので、彼は天幕に入った。そこにはシセラが

倒れて死んでおり、そのこめかみには釘が刺さっていた。

イスラエルの民をカナン王ヤビンの支配から解放する役割を果たしたのは、デボラでもバラクでもなく、ヤエルであったが、他方、見方を変えれば、自分を信用して助けを求めてきたシセラを殺害したヤエルは、愛するあまり自分の秘密を打ち明けたサムソンを裏切ったデリラと比べられるかもしれない。だが、エデンの園での「墮落」以降の「人類の進歩の歴史」と称するものが、じつは人間が人間を殺害する歴史であることを知ることであるとすれば、ヤエルの酷い行為もあらためて戦いという文脈において見なければならぬということになる。

#### 4.

ヤエルに続いて少年たちが見ていくのは、まさに戦争の連続である。エジプト人の戦争、ギリシャ人の戦争、ローマ人の戦争、ローマ人のカルタゴ人虐殺、シーザーのイギリス侵略、異端審問による拷問と火刑、バーソロミューの日のフランスでのキリスト教徒によるキリスト教徒虐殺、その上、「戦争、さらにもっと多くの戦争を見たし、そしてまだほかにもヨーロッパ中で、世界中で戦争があった。」と語り手はいう。サタンは、少年たちに過去の歴史だけでなく、未来の殺戮光景も見せるが、それは、これまで見てきたどの光景よりも、はるかに凄まじい大量殺人の光景であった。サタンは、人間が進歩を遂げてきたのは、殺害の方法においてであって、「カインは、棍棒で殺人を行った。ヘブライ人は、投槍と剣で行った。ギリシャ人やローマ人は、それに加えて、身を防衛する武具や見事な軍隊組織や兵法を作り、キリスト教徒は、銃や火薬を加えた。今から二世紀もすれば、大量殺戮兵器の致死率の精度が大いに高められるだろう。」と「文明」の進歩を見通す。

このような文明観は、マーク・トウェインの『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』（1889年）の「戦争！」と題された42章、そして43章の衝撃的な戦闘場面においても明らかに読み取れるであろう。19世紀のアメリカから6世紀のイングランドへと、一挙に時空を越えるプロットを中心となる主人公は、19世紀のアメリカ文明によって、6世紀の騎士道文化の改革を断行していくヤンキーという設定である。作品は、「入れ子構造」になっており、導入部で、「私」は、ウォリック城で「奇妙なストレンジャー」と出会い、その晩、「私」の部屋を訪れたストレンジャーが、「ぼくはアメリカ人です。生まれも育ちもコネティカット州ハートフォードですから、真正正銘のヤンキー（“a Yankee of the Yankees”）です。」と語るという構成をとっている。ハートフォードは、回転式連発拳銃の発明者サムエル・コルトが1855年に建てた世界最大の銃器製造工場であられた都市で、この語り手ハンク・モーガンは、それを連想させる「大きな銃器工場」の監督責任者であった、という（はっきりと「コルトの工場」に言及されるのは8章）。

42章で全面戦争に突入したモーガンは、戦闘準備として12の「金網のフェンス」を建設し、それにつながる強力な電線をどのように洞窟の大きな発電機と連結するか、という技術的問題の解決をはかる。そして、回転式機関銃のガトリング砲と、ダイナマイト爆雷の手配をする。騎士たちの行軍が近づいてきたとき、モーガンは、ボタンに触れ、その爆発で、それまで築いてきた「気高い文明—工場」を地上から消滅させる。敵に自分たちの武器を利用させないための処置であった。「文明—工場」とは、殺戮武器の製造工場と同義と思えるモーガンの言葉である。このときのダイナマイトの爆発力はすさまじく、見渡す限り生存者はひとりもいなくなってしまった。モーガンは、「死人を数えることはできなかった。なぜなら個人として存在していなくて、鉄とボタンとの混ぜ物といっしょに、同質の原形質となっただけの存在であった。」この言葉から、わたしたちは、直ち

に原爆投下の情景を連想するであろう。その後、モーガンは、弟子のクラレンスと夜の見回りに出て、フェンスの電流によって焼死してまもない騎士を見、また、そこに近づいてきた騎士が、仲間の騎士に気づき、肩に手を置いたとたん感電死する様子を目撃する。どれほど電流が強力か知り、モーガンは、さらに別のフェンスにも電流を送り、ついには3つの死体の壁が築かれる。なおもすべてのフェンスに電流を通し、1万1千人の死に際の苦悶の声を耳にしながら、まだ残る千人の敵を見て、モーガンは、敵軍との間の大きな溝に怒涛のような水を流し、溺死させ、その上13のガトリング砲を発砲する。砲火のあと、敵軍は全滅し、この戦争は、近代文明の中世に対する勝利に終わった。

著名な現代作家のひとりカート・ヴォネガットは、マーク・トウェインの『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』の感想」と題するエッセイ（1996年）で、第一次大戦、第二次大戦、そしてハイテクによるあらゆる残虐行為を見ていなかったマーク・トウェインが、この作品ですでに人間の条件は絶望的であるという結論に達していたその作家的心情に共感を寄せている。

マーク・トウェインは、「文明の恩恵」、「進歩と文明」という旗印を掲げて、1900年代になって、ヨーロッパの列強が、そしてアメリカもまた、ますますアジア、アフリカ諸国への帝国主義政策を強行していく政治的動向に対して、“To the Person Sitting in Darkness”（1901年）で、南アフリカでボーア戦争を断行したイギリスのジョセフ・チェンバレンを批判するなど、ペンを武器として戦いを挑んでいった。また、フィリピン問題（1902年7月アメリカ連邦議会は、フィリピンを属領とした）や、ロシア革命、ベルギーのレオポルド国王によるコンゴ支配などに関心を寄せていたトウェインは、1905年に“The War Prayer”「戦争の祈り」と題する作品を執筆している。それは、神への祈りの形式で構成されており、マーク・トウェインの終末

論的祈りの心が吐露されている。高揚した感情を抱きながら教会に座っている出征兵士を前にして、礼拝が進行しており、「旧約聖書の戦いの章句が読まれ」、最初の祈りの後、若き兵士を励ます長い祈りが続いているその只中に、見知らぬ老人が教会に入ってくる。そして、牧師の立つ説教壇に上がり、祈りが終わるのを待つ。牧師は、目を閉じ、“Bless our arms, grant us the victory, O Lord our God, Father and Protector of our land and flag!”という熱をこめた懇願の言葉で祈りを閉じる。すると、その見知らぬ老人は、牧師の代わりに立ち、「全能の神の使者」であると述べ、つぎのように語っていく。牧師の祈りにあった「われらに勝利を与えたまえ。主なる神よ。」は、暗黙には、「主なる神よ、かれらの兵士たちをわれらの砲弾で血まみれの木っ端みじんにするよう助けてください。…負傷者が痛みでからだを捻じ曲げ悲鳴を上げるのを大砲の轟音で消してしまうよう助けてください。…かれらの罪のない未亡人の心を無益な深い悲しみで苦しめるのを助けてください。かれらの幼い子供たちと共に、家から追い出し、ボロと飢えと渇きで荒廃した荒れ地を友もなく放浪するよう助けてください。」と祈っているのに等しく、それもまた父なる神の耳に届いている、と警告する。

「若きサタンの年代記」のストレンジャーが、人類の殺害や戦争の歴史を少年たちに説いたとするなら、その後に執筆された「戦争の祈り」のストレンジャーは、神への祈りを通じてでなければ、墮落後の人間はエゴイズムの牢獄に閉じ込められていることを悟らない、と説く。戦争の世紀であった20世紀から今日まで、依然として戦争の脅威にさらされているわたしたちは、マーク・トウェインの預言に心を向ける必要があるだろう。



## 引用文献

「若きサタンの年代記」からの引用は、引用文の後の（ ）にページ数を記した。

- DeVoto, Bernard, ed. *Letters from the Earth*. New York: Harper & Row, 1962.
- Ensor, Allison. *Mark Twain and the Bible*. Lexington: U of Kentucky P, 1969.
- Fulton, Joe E. *The Reverend Mark Twain*. Columbus: Ohio State UP, 2006.
- Gibson, William M. ed. *The Mysterious Stranger Manuscripts*. Berkeley: U of California P, 2005.
- Neider, Charles. *The Complete Essays of Mark Twain*. New York: Da Capo Press, 2000.
- \_\_\_\_\_. *The Selected Letters of Mark Twain*. New York: Harper & Row, 1982.
- Tuckey, John S. *Mark Twain and Little Satan-The Writing of The Mysterious Stranger*. Westport, Connecticut: Greenwood Press, Publishers 1972.
- Twain, Mark. *A Connecticut Yankee at King Arthur's Court*. New York: Oxford UP, 1996.
- \_\_\_\_\_. *The Adventures of Tom Sawyer*. New York: W·W·Norton & Company, 2007.
- Wecter, Dixon. *Sam Clemens of Hannibal: The Formative Years of America's Great Indigenous Writer*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1961.
- Zwick, Jim, ed. *Mark Twain's Weapons of Satire*. Syracuse: Syracuse UP, 1992.
- 朝日由紀子 「『若きサタンの年代記』ペイン版とギブソン版との比較考察」 『マーク・トウェイン研究と批評』第15号 南雲堂 2016.
- 共同訳聖書実行委員会『聖書 新共同訳』 日本聖書協会 1988.